

都市問題と建築家

田村 明

焦 点

都市問題がジャーナリズムに取り上げられるようになってからすでに久くなるが、今年にはさらにそのウエイトが増加してきている。ということは都市問題がいよいよ抜きさしならない深刻な状況に迫いつめられていることを意味するだろう。

今年は何勢調査の年である。5年前の1960年の調査では総人口の63.5%が行政市に、43.7%が市街地（人口集中地区）に居住していた。今年は何都市集中化の傾向が数量的にもますます明確に示されるはずである。

都市問題が問題としてクローズアップされる意義は、大きく言えば現代文明に対する危機観と反省といった極めて深刻な内容を有している。かつて都市は栄光のしるしであり、文明の象徴であった。現在何はそこに集積された人間の努力の結果に半ば投げやりな絶望感さえも見るのである。

しかしここではそのような根本問題にはふれずに、より技術的な二つの意義に注目したい。

その第一はいわゆる外部経済論、社会的費用論の形で、国民経済の視野から過度集積による不利益が明らかにされてきたことである。とくに企業間公害も生ずるにおよんでは、都市問題が一、二世紀前の単なるスラム問題などの社会問題で終るものではなく、将来の国民経済の発展の重要な課題であるとの理解が生じたことである。

第二には従来都市の中に個々に生じていた交通問題、住宅問題、環境施設問題、清掃問題、防災問題等がバラバラの問題ではなく、都市問題として総合的な高い次元から処理されることなくしては、結局役に立たないとの理解である。交通問題の処理にただ輸送力の増加だけで、土地利用計画と無関係であれば何等の意味をなさない。都市問題とはそれらの有機的な関係を前提にしてとりあげられるべきものである。都市工学という新しい学問の成長も、これを少くとも工学面から解決しようとするもので意義のあることである。

それならこの都市問題の解決に建築家はどのように参加すべきであろうか。都市問題の困難さは何よりもその問題が複雑遼大で、現代社会の全体にかかわる点である。それは現代のあらゆる矛盾の集積であり、沈黙物ともいえる。解決には政治、経済、社会の問題が蔓草のようにからみあっていて、その

全部をときほごすことは容易ではない。建築家の側からアーバン・デザインの問題が大きくとりあげられ、建築家の都市計画への参加が叫ばれてきたが、そこから発表される多くのプロジェクトも、その大半は単なる絵に終わってしまった。確かにそれは解決への一つの夢を持たせる意味はあったにせよ、現実の都市問題が要求している点とはかなり次元を異にしている。それらは現在の困難な問題点を捨象し、理想的な状態における都市の形態を示したものであるが、現在解決をせまられている都市問題とは、まさに建築家が捨象した困難かつ複雑な前提問題そのものであり、解決への姿勢がその出発に当たってすでにあやまっているといえよう。

一個の建築物においてさえ、企画をおこし、資金計画をたて、収支のバランスを考慮し、土地取得を行ない、附帯的な近隣の問題（道路、水道、電気法律関係など）を解決し、その間に多くのフィードバックを重ねながら、敷地と予算が提供され、建築家の活動が始るのである。建築完成への大部分の時間とエネルギーは建築家参加以前に費消されている。

建築の場合は建築家が企画の形で若干その部分に参加することはある。しかし都市となると、問題の規模はさらに数層倍し、しかもそれらがさらに累乗的に複雑にからみあった問題として提供されるから、建築家が少々規模の大きい建築物の設計のつもりでアプローチするのであれば、解決は全く不可能である。その場合は都市計画というよりは、そのうちの一分野の群造型計画、人または車の流動計画等を担当するにとどまるだろう。

それなら一たい誰がこの都市問題の解決に当るのだろうか。政治家、経済学者、社会学者、法律家、官僚等それぞれの役割を与えられ、この問題の解決にとりくむことが必要である。しかし最終的には都市は政治理念でも法律でもなく、鉄とコンクリートにより建設された物体である。このカギをとく重要な役割は、新しい都市計画家——フィジカルプランを主体にしたゼネラルプランナー——に与えられるだろう。このような職種はまだ生れていない。長い歴史をもって人間に生産、休息、娯楽等あらゆる生活の場を与えてきた建築家の中からも、新しい脱皮を行なったプランナーが生れる可能性がある。建築家はより深く都市に学ぶべきであろう。